カトリック大阪教会管区部落差別人権活動センターたより

秋号
16年11月
No.45

カトリック大阪教会管区部落差別人権活動センター事務局
〒604-8006 京都市中京区河原町三条上ル　カトリック会館７Ｆ
発行人／吉岡秀紀
TEL&FAX 075-223-2291　E-mail: bukatu@kyoto.catholic.jp
Home Page http://www7b.biglobe.ne.jp/~bukatucenter/

沖縄の今

カトリック那覇教区泡瀬教会信徒
山田圭吾パウロ

「人と話をするときは、同じ土俵に立たねばならない。共通の認識がなければ、一方的な話になり意味が通じていないことがある。同じことを話しても、話し手、聞き手、どちらにも極端な人がいるので、そのことによって誤解が生まれ、果ては偏見を助長することにもなりかねないから・・・。」

なぜこのような、「当たり前」、「常識」とも言われそうなことをあえて冒頭に持ってきたかと言えば、沖縄に生まれ育った私が沖縄のことを伝えようとしても、そのよって立つ位置が様々な人たちが受け止めていることが、これまた様々だったことに「この程度なのかな」と少々気落ちしたり、逆に新たな気づきを与えられたことで喜びを感じたりした経験があるからである。だからという訳でもないが、振り返るといつも同じようなことばかり言ったり書いたりしているのは「沖縄」のことが、なかなか伝わっていないことにもどかしさを感じていることもある。知っている人にとっては「また同じ話か」と食傷気味に投げ出したくなるかもしれないが、人は「忘れる」ものだから、繰り返し何度でも訴えたい。私自身への戒めのためにも。

というところで、皆さんは「沖縄」がどこにあるかご存じだろうか。「それくらい知っているよ、馬鹿にするな」と言いたくなる人もいるだろうが、まずはそのことの確認から始めたい。それというのも基本中の基本だからである。このような言い方をすると「それならお前は福島が、富山が、愛媛がどこにあるか知っているのか！」と言われたりする。しかしそのような問題ではなく、日本国によって勝手に組み入れられたり、切り捨てられたりした歴史や、現在の日本国の領土、領海は沖縄があることによってかなりの面積になっているのに、そのことを無視されているように感じるからである。

大阪の小学生と話した時「沖縄って知ってるよう、北海道のそばでしょ！」と言われたときの衝撃。大げさでなく、それが日本人の感覚なのかと思わされた一つであった。それ

は今でも、沖縄は石川県の上の方（日本海）にあると思っている高校生がいることからも伺える。なぜそのような認識になるか。毎日テレビから流れる天気予報図を思い浮かべて欲しい。確かに「北海道のそばにある」ように見える。それらを見続けることによって刷り込まれてしまう怖さ。沖縄がどこにあるかさえ分からなければ、今の沖縄で何が起こっているかに関心が向かないのも致し方ないのだろうか。

しかし、そのような形でも沖縄が表記されているのはまだいい方で、沖縄（県）や奄美諸島の含まれない「日本地図」の多いこと。テレビや新聞、雑誌、ポスター、様々な媒体に出ている「日本地図」に沖縄がなくても、何の違和感もない感覚が育つことに危機感があるのである。連日そのような地図を見せられて育つ感覚。弱い立場に置かれた人たちが目に入らなければ、そのことの問題性にさえも気づくことはないだろう。

ある人は「日本には障がい者がいないのですか？」と外国人に問われた。ほとんどバリアフリー化がされていない状況では車イスでも町に出ることが困難なため、障がい者を隔離している社会のいびつさを認識させられたとのこと。教会でも「こちらにはそのような人（車イス使用者）はいないのでバリアフリーは必要ありません。」と言われたことがある。実際にはいるのだが、車イスでは入堂しにくいから来られないのだ。

沖縄のことを知った人から、「沖縄の人はどうして黙っているのですか？」と言われたこともある。「冗談じゃない。これまで沖縄はずっと叫んできた。聞かなかったのはあなたたち（日本人）ではないのか！」と言葉を荒げたこともある。障がい者に対しても同じように、「（あなたたちが）黙っているから（私たちは）分からないのだ」、と言うとしたら、決して弱い立場の人のことを知ることはできないだろう。

ハンセン病の隔離政策が成功していたと思わされたのは「ライ予防法」が廃止された際「ライ病って何ですか？」と同年代の人に問われたときである。沖縄にも二ヶ所の療養所があるのに、その存在さえもほとんど意識されていなかった。「隔離」することによって外にいる私たちは「安全・安心」と思わされていたのである。日本国内で「沖縄」に過重な米軍基地負担を押し付けて安保条約による平和を享受している多くの日本人。精神病院に「危険な（と誤解されている）人たち」を押し込めて知らぬ顔の地域住民。原発を自分たちの生活圏から遠くに押し付け「安全神話」の夢を見る都会人。これらの「隔離政策」の構図は、他の様々な社会状況にも表出しているのに、見て見ぬふりの私たち。問われるべきは「隔離されている側」か「隔離する側」か。

神がその一人子を世に賜ったのは、私たち人間と同じ位置に立ってその苦しみを分かち合ってくださったのではないのか。上下関係ではなく、立場の違いを超え、隔ての壁を取り壊してくださったのではないか。その感謝と喜びを知っているはずのキリスト者でさえもが自分たちと少し違う人たちを排斥しようとしているのだ。

このようなことを思う日々、沖縄の状況がどの程度知らされているかと思うと暗澹たる気持ちにもなる。しかし、希望もある。その沖縄の現状や歴史を知り、体験し、明る

い未来を共に構築したいとして訪れる皆さんがおられることである。日常に帰ると忘れてしまうことも多いかもしれないが、その時は何度でも沖縄に来てほしい。その度に新たな出会いと発見があるはずである。そして、自分たちの日常にある「構造的差別」にも気付いてほしいと願う。これらは皆同じような問題を含んでいるので、一つでも気付いて取り組めば、ひいては沖縄のことにもつながっていけるだろう。

沖縄県名護市辺野古で進められているアメリカ軍キャンプシュワブ基地への普天間基地移設に伴う工事が強行されていて、20年以上も反対運動が展開されていることはいくらか知られてきているようである。だが、そこからさらに車で一時間あまり北上したところにある東村高江地区に隣接するアメリカ軍北部訓練場で新たなヘリパッド（ヘリコプター離発着）を建設中であることはなかなか知られていなかった。沖縄の人でさえも陸の孤島のような場所のことで取り組みが弱かったのだが、工事がますます強行されるようになって連日100人以上の人が詰めかけ反対運動を行っている。そのような中、先日は大阪から派遣された機動隊員が反対活動をしている市民に向かって「ボケ、土人が」と暴言を吐いたり、別の隊員が「シナ人」と侮蔑的な表現をしたことが大きなニュースになった。それを聞いたとき、蔑むべき野蛮人として人間そのものを展示したという「人類館事件（1903年）」が思い起こされた。人間の差別性は世代を超えても継承人間の差別性は世代を超えても継承されるのかと悲しくなり、悔しい思いをしたのだった。その人類館事件では沖縄の人からの抗議があって琉球人の展示は取りやめられたというが、その抗議の内容は「アイヌのような人たちと一緒にするな」とのことだったというから何をかいわんやではある。侮蔑的な発言は許されないが、それを咎める側の認識がどこに立つものであるのか。今回の「土人」発言に対する反発が、そのような意識の表れでは同じことの繰り返しである。同じ人間として互いに敬意を払い、常に対等な立場で話すことができるようにしたいと願うものである。

今回の事件を隊員個人の資質等に矮小化して事の本質を見失ってはならない。彼がなぜこのような発言をするに至ったのか。わざわざ遠くの沖縄まで派遣されて、連日の暑さや時折のスコールに見舞われながら、さらには罵声を浴びせかけられれば腹も立とうと言えようが、一体誰が彼らをそのような状況に送り込んだのか。元凶は日本政府である。地元沖縄の声を聞かず、アメリカ軍におもねて、「粛々と」、軍事基地を無理やり造ろうとすることに問題があるのだ。当の隊員を大阪に返したからと言って問題を片付けようとするだろう、それで済む問題ではない。それこそ国際問題として提起されるほどの人種差別問題であるが、派遣している立場の大阪府知事は全く的外れの見解を持っているようだ。その問題発言自体の背景を顧みることなく、常に隊員に対して暴力的な表現をしていたから言われた側にも非があるのではないかとの釈明をして非難されている。職務を懸命に果たそうとしたとして、部下を庇おうという姿勢から、事の本質を見極めようとせず、むしろ沖縄の人が差別されるのは、さも当然だとばかりの態度には、

日本人による沖縄への構造的差別の表れと受け止められている。このような思想が、一般的な日本人の考え方なのか、無意識のうちにある差別感の表出なのか。沖縄に対する普段の日本政府のやり方を見ていると、どのように言い繕ってみても、沖縄を蔑視しているとしか思えない。

民意を表すものである選挙でも、常に新基地建設反対を表明している候補者が当選しているにも関わらず、これらを無視し、聞く耳持たずで工事を強行する日本政府。自分たちの立場を強調するときには「日本は法治国家」と言い、現場で反対の声を挙げる非暴力の国民を暴力的に強制排除する機動隊。今回の事件にも「許されざるべきこと」と言いながらも、お咎めなし。そのような背景が、日米安保条約や日米地位協定によって保護されている米軍兵士による事件、事故にも繋がっている。殺人や強姦、飲酒運転で死亡事故を起こしても基地内に逃げ込めば日本警察には逮捕権すらないのに、基地のフェンスの外を歩いていただけで「不審者」扱いをされ、腰に銃を携帯した屈強な兵士に取り囲まれて詰問される恐怖。すべては基地あるが故の問題なのに、その本質から目をそらして住民に負担を強いる理不尽さ。夜間の飛行はしないことになっているはずなのに、夜中の３時でもお構いなく飛び交う戦闘機。毎年のように落ちる軍用機は何を積んでいるか分からない怖さもある。沖縄近海では水爆を積んだ戦闘機が空母から落ちて水没したまま。「非核三原則（核を持たず、造らず、持ち込ませず）も無視。ヘリコプターが大学構内に落ちても現場検証すらできない現状。これらを日本政府は、日本国民はどのように捉えているのだろうか。

「癒しの島」、「南海の楽園」とも言われる沖縄は精神障がい者の率が日本の平均より高いという。いまだに沖縄戦の悲惨さを引きずっている人がいる。花火にも爆音を思い出すからと恐怖を感じ、墜落事故と聞けば、50 年も前に小学校に墜落して学童や地域住民が犠牲になったことを思い出して眠れなくなる人もいる。工事をするたびに不発弾が発見され、時折爆発させてしまい死傷事故が起こる。毎年数十トンも処理しているのに、今のペースでも後７~80 年かかると言われている。住民を巻き込んだ地上戦で一家全滅した家族もあるほど大きな犠牲を強いられた沖縄に、これ以上の負担を強いようというのはあまりにも惨いではないか。空も陸も海もすべては軍事優先。最大の環境破壊は戦争と言われるが、その戦争のための訓練をする場所を神から与えられた沖縄の自然を壊してまでも造ろうということに正義はないのだ。

部落差別問題についていえば沖縄の人にはなかなか分かりにくいものである。所謂被差別部落がないし、集落のことは今でも「私たちの部落では」というように違和感なく使われている。以前、部落問題についての現地学習で訪問したことがあるが、「なぜこれが差別の対象になるのだろうか？」と同行した沖縄の人と不思議がったものだった。沖縄では家の新築祝い等で、自分たちで山羊を調理するし（現在では禁止されている）、市場へ行けば豚や牛の肉を切り分け販売している親族、友人がいる。それからすると、

沖縄の日常全体さえも差別される対象なのかとも思わされたのであった。そのような日々の積み重ねが侮蔑的な発言に繋がったとしたら、無知と無関心の罪が問われまいか。日々のミサの中で「思い、言葉、行い、怠りの罪」を告白している。思ってしまったこと、言ってしまったこと、やってしまったこと、のようにある種不可抗力的なものもあるが、「やらないこと」には意識的な要素が強いのではないかと自戒している。沖縄の地において自分のなすべきことを怠らないようにしたい。

沖縄　海と森の抗い

イエスの小さい姉妹マグダレナ三千代

沖縄を初めて訪れる前に1970年に書かれた大江健三郎著「沖縄ノート」を読んで見た。(1970年は大阪万博の年、核の平和利用と称した最初の原子力発電による電力がつながる。私は受洗して2年目、教会の外で反Expo70、反原発を提唱する人々の側にいた。)読み続けるには余りに重い内容であるが、50年以上の歳月が流れたとは感じさせない沖縄の現状、さらに数百年に及ぶ国家差別がそこにある、と突きつけられる思いがした。

1609年：薩摩藩の島津氏の琉球侵攻による首里城の開城。薩摩藩、清への両属という体制を取りながら琉球王国は独立国家としての体裁を保った。

1871年：明治政府の廃藩置県により琉球王国の領土を鹿児島県の管轄とした。

1872年：琉球藩の設置。

1879年：武力的威圧の下で琉球藩を廃止し沖縄県を設置され、琉球王国は終わりを告げる。**琉球処分**。明治政府の**植民地化政策**により法的、制度的な差別を受ける。

1890年：琉球八社の中心であった波上宮が国営化されるとともに沖縄各所にあった琉球の信仰における祭祀などを行う施設や聖域(ウタキ、ウガンジュ)は村営化され、拝殿や鳥居を設置された。これらの政策の一環として、1898年には徴兵令も施行された。旧来の信仰の排除。

第四代沖縄県知事の奈良原茂(ならはら　しげる)と、官職を辞してこれにたちむかい、非業の死を遂げた社会運動家謝花昇(じゃはな　のぼる)の対立は有名。

沖縄の産業のモノカルチャー化が発達するとともに、経済構造は日本本土経済に従属したものになっていった。産業が単純化されるとともに、沖縄の人件費は絞り込まれ、少人数で大量の農地を耕さねばならなくなっていた。

(1903年:**人類館事件**「学術人類館事件」、「大阪博覧会事件」とも)は、1903年に大阪・天王寺で開かれた第5回内国勧業博覧会の「学術人類館」において、アイヌ・

台湾高砂族（生蕃）・沖縄県（琉球人）・朝鮮（大韓帝国）・支那（清国）・インド・ジャワ・バルガリー（ベンガル）・トルコ・アフリカなど合計 32 名の人々が、民族衣装姿で一定の区域内に住みながら日常生活を見せる展示を行ったところ、沖縄県と清国が自分たちの展示に抗議し、問題となった事件である。）

大 正 期：第一次世界大戦が終わると、深刻な戦後不況に陥った。砂糖価格は下落し、食糧供給力を失っていた沖縄は悲惨な状況になった。沖縄人口の 7 割を擁していた農村部では、米どころか芋さえも手に入れることが出来ず、ソテツの実や幹を毒抜きして食べたりもした。毒抜きが不十分で死んでしまうこともあり、ソテツ地獄などと言われた。

地域にとって必要な労働力はモノカルチャー化によって切り取られ、モノカルチャー化によって生じた〈余剰の労働力〉が海外へと売り払われた。沖縄の経済構造は自律的に回復できない水準に至った。

1930 年：悲惨な状況の中、1930 年頃（昭和 5 年）には、教育労働者組合が結成するなど学生運動や教員の組合活動が活発化した。政府は、〈赤化への恐怖〉を名目に特高警察を配置し、労働組合に対する弾圧を行なった。

一方、急速に進められた同化政策によって、太平洋戦争までに日本本土との〈一体感〉が人工的に作られた。1937 年に日中戦争が始まると、県主導で厳しい琉球語撲滅運動が進められ、方言の禁止 (人々の生活言語を「方言」として区別した)、標準語の強制や、懲罰などが行なわれた。

沖 縄 戦：サイパン島が陥落すると政府は、沖縄戦を想定した住民の疎開を検討しはじめた。

沖縄防衛を任務とする軍参謀長が「サイパンが陥落したのは島民 5 万が軍の懐に入り込み、活動を妨害したからだ。沖縄本島の場合、約 42 万の島民を 5 万から 10 万ぐらいにまで退去させなければ、再び前者の鉄を踏むことになる」と指摘していたように、軍も、住民保護目的ではなく、作戦上の目的を重視した。本土出身者以外の多くの住民は疎開を受け入れることを拒んだ。県当局は、疎開を警察部に担当させ、威力をもって住民疎開を推進した。住民の反発する中、本土や台湾へ 8 万人以上が集団疎開し、ここでも琉球民族は分断されることになった。

戦　　後：アメリカ軍によって軍事的に占領され、1970 年代になると、日本で安保条約更新に激しい反対運動がなされる中、日米安保条約への批判をかわすカード

として利用され、返還された。

1972 年：沖縄返還。佐藤元首相『非核三原則』でノーベル平和賞、ただし沖縄核密約を結んでいたことが後に判明。

現在でも、対米従属型の保守体制を持つ日本に対して従属するという支配の入れ子構造を成し、米国の軍事拠点としての役割を背負わされている。

－ 400 年前から続く、日本による沖縄の植民地支配の歴史－インターネットから

今回の沖縄行きは、最強と言われた台風よりほんの一足先に着いた。今日中に辺野古、高江を回る方がよいとの助言で、那覇から車で２時間ほど、キャンプシュワブの正門前にあるテント村へ。台風を避けるため既に片づけられていたが、それでもほんの少し手伝いながらお話も聞けた。

さらに一時間、高江も片づけられていたが、残っていた男性が言葉少なに誘導してくれるままついて行くと、小さなテント村やんばるの森の入り口の前には、なにわ、川崎、たまナンバーの護送車が３台、妨害するためか移動し、車間を埋めるかのように警備員や警察官が立ち尽くしている。軽自動車２台に４人の高齢者に対してである。

ここ高江では、ヘリパッド建設の強行が、参院選直後の明け方から始まっている。ヘリパッドは、高江の集落を囲むように、全部で６箇所建設される予定で、そのうちの完成した２箇所には、すでにオスプレイが配備されてしまった。６箇所すべてを完成させるための工事に抗議する市民を排除するため、全国から集めた 500 人という、異常ともいえる数の機動隊を投入し、少し離れたホテルに寝泊まりしながら、抗議する住人や支援の人たちをごぼう抜きする。誰かが言っていた、「数カ月も 500 人規模で常駐させるという事は、余剰人員ということやな～」。

本土が Expo70 に沸いていた 1970 年、沖縄はまだアメリカの統治下にあり、

コザでアメリカ兵が起こした交通事故を契機にコザ暴動が発生、常日頃からアメリカ兵が優遇され、沖縄県民が不当に差別されたことに対するコザ市民の怒りが表面化したもの。25年ぶりの国政参加、基地問題、企業公害で政策の基本姿勢をめぐっての激しい選挙戦で7人が選出されたとある。

沖縄の人たちが生きていたことと本土のそれとの差は、今も本土の大多数の無関心と、元アメリカ海兵隊員で軍属の男性から20歳の女性が暴行・殺害された事件を受けて、6万5000人の県民（主催者発表）らが参加する追悼集会で、オール沖縄会議共同代表で名桜大4年の玉城愛さんは「安倍晋三さん、本土にお住まいの皆さん、加害者はあなたたちです。しっかり沖縄に向き合ってください」と涙ながらに訴えた、叫ばざるを得ない現実との差である。

沖縄と本土の私たちとの関係を考えながら、考え続けることは苦しみを引き受けることと気づかされている時に、正義と平和協議会が上映を呼びかけている沖縄の映画を観た。力と金という権力を阿漕なまでに使い、米軍基地はいらないという沖縄の民意を圧殺し、単に美しいだけでなく、辺野古の大浦湾だけに生息する数多くの生物たちと共に海を殺し、固有種が生息するやんばるの森を蹂躙し破壊している。海が世界を一つに結ぶことを思う時、辺野古の海を殺すことは、取り返しのつかない仕方で地球を傷つける罪を犯しているのではないだろうか。

「2020年の東京オリンピックを成功させよう！」一色であるかのような空気、思考停止装置のような空気に抗って、知恵と心を尽くして、沖縄の人たちに繋がり続ける道筋を見つけたいと切に願う。

署名のお願い

①沖縄県民の民意尊重と、基地の押し付け鉄塊を求める　全国統一署名。

②東京高等裁判所の植村稔裁判長宛てに狭山事件の再審開始を求めるハガキを同封しています。

一人の一筆が苦しみ続ける人たちの道を開きます、世論を届けましょう！

シリーズ：聖書 (いのちのことば) を生きる⑪

「大きな淵」

【ルカによる福音書 16 章 19 ～ 31 節】

吉岡秀紀 (大阪教区司祭)

今回はルカによる福音書の 16 章から「金持ちとラザロ」として知られる箇所を読んでみたいと思います。

前回も同じルカ福音書から 15 章の「『見失った羊』のたとえ」を取り上げました。この 15 章は、「見失った羊」、つづいて「無くした銀貨」、そして「放蕩息子」の 3 つのたとえからなっています。

先日、「放蕩息子」のたとえを分かち合う機会がありました。そこでも感じたのですが、わたしたちは「放蕩息子は心の底から回心したので、父親に受け入れられた」と捉えてきたようです。

このたとえをもう一度読んでみます。この息子は父から強引に (？) 譲り受けた財産を浪費して、食べることにも事欠くようになり、追い詰められて父親のもとに帰ることを決心します。不本意な帰郷だったのでしょうね。「お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください (18~19 節)」なんて言い訳を事前に準備しているぐらいですから。

父親は毎日のように息子が去っていった方角を見ていたのでしょう、まだ遠くにいるのに息子を見つけて、自分から走り寄って抱きしめます。さぁ、息子は準備してきたセリフを口にします「ワタシハツミヲオカシマシタ モウムスコトヨバレルシカクハアリマセン……」。ところが父親はこのことばには無反応。聞いてすらいないようです。彼にとっては息子が帰ってきたことだけで「死んでいたのに生き返った」ほどの喜びだったのです (20 ～ 24 節参照)。

このたとえ話でイエスが証ししたのは、弱いわたしたちを無条件で受け入れる神の思いであり、放蕩息子の回心は、むしろ父親に受けとめられてからはじまるのではないでしょうか。それは「放蕩息子が心を入れ替えて真人間になったからゆるされた」という理解ではたどりつけません。

さて今回の「金持ちとラザロ」です。放蕩息子の 15 章、つづく今回の 16 章も「不正な管理人」のたとえにはじまり、金銭に執着する指導者との対決、そしてこの「金持ちとラザロ」となります。古来からイスラエルにおいては羊などの家畜が (神から与えられた、人の営みを支えるいのちの恵みとして) 重要な財産と見なされていたことを思えば、15 ～ 16 章は、日常の生々しい現実として富と金銭をとりあげているようで、興味深いです。

「いつも紫の衣や柔らかい麻布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた (19 節)」金持ちと、金持ちの門前に横たわり、その食卓から落ちる物で腹を満たしたいと思ってい

た、できものだらけの貧しいラザロ (20 節参照)。

やがて、それぞれ亡くなり、ラザロは「天使たちによって宴席にいるアブラハムのすぐそばに連れて行かれ (22 節)」、金持ちは「陰府でさいなまれ (23 節)」ます。死後のふたりこのように分けたのはなんだったのでしょうか？

この箇所を思いめぐらすにあたって、長々と「放蕩息子」のたとえについて触れたのは、このふたつのたとえ話についてわたしたちは同じような受けとめかたをしていると感じたからです。「放蕩息子は回心したから父親にゆるされ受け入れられた」、そして「ラザロは神の前に正しい人であったので、天の宴に招かれた」。いずれも実際に教会で何度も耳にしたことです。ここに前回の「見失った羊」のたとえについて、羊飼いに従った 99 匹の「迷わなかった羊」を加えてもよいでしょう。前回のくりかえしになりますが、自分たちを、羊飼いについていった 99 匹＝「悔い改める必要のない九十九人」(15 章 7 節) のように捉えている指導者たちに、イエスは「あなたたちは、自分たちこそ落ち度のない信仰者だと思い上がり、人を裁いているのではないか。むしろ、誰もが迷い出た、弱い一匹の羊なのだ、あなたがたもそうなのだ」とおっしゃっているのでしょう。放蕩息子も帰郷を決めた時はまだ回心していませんし、ラザロもよいわざを行ったというようなことは書かれていません。

陰府から「父アブラハムよ、わたしを憐れんでください。ラザロをよこして、指先を水に浸し、わたしの舌を冷やさせてください。わたしはこの炎の中でもだえ苦しんでいます (24 節)」と叫ぶ金持ちに対して、アブラハムは「子よ、思い出してみるがよい。お前は生きている間に良いものをもらっていたが、ラザロは反対に悪いものをもらっていた。今は、ここで彼は慰められ、お前はもだえ苦しむのだ (25 節)」と答えます。ラザロが神の宴席に招かれたのは、善行の報いなどとしてではなく、人としての尊厳、権利を奪われていたからなのではないでしょうか。

金持ちは、ラザロに舌を冷やしてもらうことができないと知ると「……わたしの父親の家にラザロを遣わしてください。わたしには兄弟が五人います。あの者たちまで、こんな苦しい場所に来ることのないように、よく言い聞かせてください (27 節)」とアブラハムに願います。ラザロが神の前で特別正しい人ではないのと同じく、この金持ちも身内を深く思いやることはでき、自分さえよければという人ではないのです。では、両者を隔て、越えることをできなくしている「大きな淵」(26 節) とはなんなのでしょうか。金持ちは積極的にラザロを虐げたり、蔑んだりしたわけではないでしょう。しかし、いつも近くにいながらラザロを見ようとしなかった、関わろうとしなかった。このことこそ神から問われているのではないでしょうか。それは “ 無関心 ” という “ 加害 ” です。この世界のどこかで、あなたのすぐそばで、奪われ、踏みにじられ、傷つき、悲しむ人がいるはずです。神からいのちを注がれた人であることに変わりはないのに。

人を特別視することは、苦しむ人の痛みを、そしてその痛みを自分の痛みとして受けと

めるイエスの思いを「他人事」にしてしまう、無関心への言い訳ではないでしょうか。目の前にいるこの人に向き合い、考えて、悩んで…いつか宴をともにしたいと思います。

棄民政策はもはや許されない

―フクシマの現状報告―

福音の小さい兄弟会　太田勝

国家の存続のためには、国民の生命と安全は切り捨ても止むをえない、というのが国際社会に船出した明治政府以来の日本政府の政策の基調だと思いますが、現在の情報社会においてはもはや事実を国民の目に隠して政策遂行を続けることは許されないと思います。事実を隠して遂行された原発安全神話の尻拭いをしているのが、フクシマの現状ですが、国民である僕らが監視の目を緩めれば、またぞろ棄民政策が頭をもたげてくるのです。監視を続けるという視点からフクシマの現状報告をしたいと思います。

フクシマの知足庵にくる度に、コンビニで地元の新聞，福島民報と福島民友を買って、現地に来た利点を生かしていましたが、今年の６月末には、和歌山に戻った時も、現地の動きが知りたくて、ついに福島民報を購読することにしました。全国紙では取り上げられない現地の重大ニュースのいくつかを取り上げて、現状報告とさせてもらいます。

１.「石棺」問題：メルトダウンした核燃料＝デブリの取り出しは困難なので、チェルノブイリではデブリは取り出さず、原発建屋全体をコンクリートで覆い、石の棺のようにしてあります。この方式を福島第一原発にも適用するか、という問題提起がチラッとなされました。300 頁に及ぶ廃炉についての戦略プランのなかでたったの６行ですから、チラッともいいところですが、ことは重大なので、福島県側では猛反発が起こりました。この戦略プランは東京電力福島第一原発の廃炉技術を研究する「原子力損害賠償・廃炉等支援機構」が 2016 年７月 13 日に公表したものです。

原発は 40 年と使用期間が終了すれば、建屋から核燃料から全てを取り払い、更地にして、放射線量も 0.01 ミリシーベルト以下に戻して、土地所有者に返却する。これが東電と福島県との契約ですから、デブリの取り出しは当然で、もし「石棺」で覆い、そのまま現地に放置するとなれば、重大な契約違反、とんでもない居座り、になります。

ですがアメリカでの 1976 年のスリーマイル島の原発事故では、デブリの取り出しに、ものすごく苦労したのでした。堅く固まったデブリを 10 ｋｇの大きさに切り分けるのに、ノミが刃がこぼれてすぐだめになったのでした。ノミではなく水の噴射で切り分ける新技術が工夫して出来たとしても、デブリの状態さえ掴めていない現在、先行きは真

っ暗です。チェルノブイリでも実は現地の責任者は、デブリの取り出しにすぐに取りかかろうとしたのですが、専門家が放射線量が高すぎて危険だから、40 年とか 100 年とか待って、放射線量が低くなったら取り掛かろう。ということに落ち着いていますから、「原子力損害賠償・廃炉等支援機構」が石棺方式を検討するのは、理論的には当然なのですが、「原発は安全」という安全神話で住民を説得してきた東電・国は住民側の不信に大慌てで、「いえ、いえ、石棺は決してしない、ということを言うために書いたのです。」と釈明に追われて、公表後一週間で「石棺」文言を戦略プランから削除したのでした。内堀福島県知事も「表現を削除・修正したことで石棺方式の導入はなくなったと受け止めている。」と述べて一定の評価をした、と報じられました（2016 年 7 月 21 日）。

これで一件落着ではありますが、修正後の文章にも、「チェルノブイリ 4 号機事故への取り組みから懸念されるように」との石棺への事実上の言及は残っていますから、デブリ取り出しの終わるとされている 40 年後に依然として取り出しが出来ない状態が続けば、この問題は再燃するでしょう。

（2016.10.12. の福島民報によれば、メルトダウンした核燃料は合計 257 トンでこれがコンクリートなどの構造物と混じり現実の重さは 880 トンと発表されています。国際廃炉研究開発機構の解析結果。これだけの量を再臨界の起きない 10 ｋｇの大きさに切り分けるとして、どのくらい時間がかかるか、取り出しはほぼ不可能という方が正直でしょう。これらのデブリは半減期が 40 年のものが半分はあるでしょうがプルトニウムのように 2 万 4000 年の核物質もありますから、取り出せたとしても、最終処分場を造らねばなりません。無害化は出来ないので、せめて 2 万 4000 年の半減期を 400 年くらいに短縮させるよう核分裂を早める処理方法を見つけねばならない、と友人の物理学者は言っていました。400 年でも江戸時代初期からの組織は幕府も含めてほぼ存在していませんから責任をだれがとるか闇は濃いのですが。）

2. 帰還困難区域の未来：安倍さんは「東京オリンピックに来られる方々に、復興したフクシマを見ていただく。」と招致演説で大見得を切りましたので、2020 年のオリンピックまでに、大部分の避難者に帰還してほしいのです。一年前に帰還が始まった楢葉町の帰還者は約一割で、放射線の線量が高くて帰還困難な地域は依然として放置されてきました。僕のイメージでは「冥界の王＝プルートンの支配地域」になってしまっているのが帰還困難地域ですが、「原発は安全」という安全神話で住民を説得してきた東電・国は、「帰還できない」と言うわけには行かないので、この度方針を出しました。2016 年 7 月 18 日の福島民報によれば「政府方針は、帰還困難区域の一部解除を平成 33 年をめどに始める。」というものです。現在まで、全くの手付かずでしたが、平成 29 年度から除染やインフラ整備をはじめていく、という方針です。7 市町村が対象で、大熊町は役場周辺、富岡町は住宅街があり人口が多い「夜の森地区」、双葉町はＪＲ双

葉駅西側など、除染により放射線量が政府基準の年間20ミリ以下に下がりそうな地域を選んで、「復興拠点」とする考えです。この拠点でさえ、5年後なので、それ以外の地区はどうなるか、と拠点として選ばれなかった地区の住民は、やきもきするわけですが、僕の考えでは、このような蛇の生殺しのような嘘はやめて、チェルノブイリの廃村とされた126村のように、「帰還は出来ません。」「帰還困難区域は将来も帰還できない、帰還不可能区域とします。誠に申し訳ないが、今までうそをついて騙してきました。もう、これ以上うそをついていたら、皆さんの生活設計がめちゃくちゃになりますから、今年で嘘は止めます。ごめんなさい。故郷を奪って誠にすみません。本来、金銭では償えないことではありますが、それ以外に方法がないので、賠償を申し込んでください。」とするべきでしょう。現に、中間貯蔵施設が30年後に土地を返すという約束で、大熊町と双葉町に建設されることになっていますが、ここの住民たちは土地を国に提供し立ち退きを始めており、先祖の墓を国が「保存」してくれるかどうか、というところまで国から踏み込まれています。

日本の政治家のやり方について：日本は政治には特に「本音と建前」の差が大きいのですが、福島原発の建設を安全神話でオブラートにつつみ、事故の起きた後も、「安全と言うのは間違いでした。」と誤ることなく、なし崩し的に、住民を既成事実で心理的に攻め落としていくのが、日本の政治のやり方です。このやりかたの行き着く先は、被害者の泣き寝入りで、このようなやり方は、そろそろ止めにしないと、地球は壊れてしまいます。次世代の不利益まで考えてはおれないよ、いまの生活が成り立っていけば、それでよしとしようではありませんか、という誘惑に打ち勝たねばならないと思います。棄民政策を成功させてはなりません。

福島を訪ねて

田中　待子（大津教会信徒）

今年の4月末に友人三人で女子旅。福島に行ってきました。あの3,11から4年、あれだけの原発事故かあったのになぜ再稼働、と怒っていても毎日の生活の中、あの痛ましい原発事故も自分のなかでは風化しつつある。

このたびは、鮫川村の「知足庵」に泊めて頂いた。自然に囲まれた新緑の山里は、九州生まれの私にとっては、心癒されるなつかしい故郷が思い出された。「知足庵」では、和歌山の太田神父様がご一緒してくださり豊かな自然の山里と知足庵の金澤さんが、用意してくださったおいしいお料理、そのうえ毎日ミサに預かるという贅沢な時間だった。

神父様に車で案内して頂き6号線を北上した。新緑あふれる山里を走り抜け気持ちも

リフレッシュしていたが、第一原発近くになると景色が一変した。黒い袋に入った汚染土砂が幾重にも積み重ねられ延々と続いている。これは、今後どうされるのか？どこにもっていかれるのか？双葉町から浪江町へと続く　国道両端は、ひとっこひとりいないゴーストタウン化した街並み、そのまま時が、止まっているようだった。ただそんな中で目立つパトカーの巡回が、なんとも異様な光景であった。

住宅街に入ると建てられて間もないと思える現代的な家が立ち並ぶ。この原発事故がなかったら、今頃いつもの暮らしがあっただろうに胸にこみ上げる怒り、行き場のない思いで震えが来た。

楢葉町の聖母訪問会の家を訪問した。人のいなくなった町に仮設から帰ってこられるお年寄りの話し相手になれるようにと、シスターたちは楢葉に家をかりて新しい共同体をはじめられた。シスターたちが用意してくださった、おがずをいただきながらおにぎりを食べて、お話を伺った。

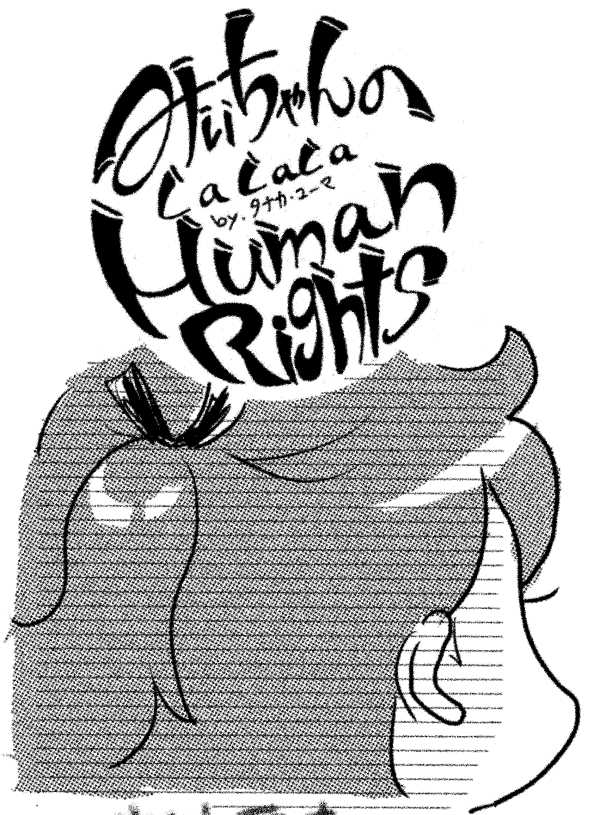
楢葉町の聖母訪問会のお御堂

浪江町では殺処分されようとしていた牛を飼っておられる吉澤正巳さんの希望の牧場を見に行った。立ち入りができない警戒区域に指定されているため遠回りをしながらたどり着いた。「警戒区域内の牧場、闘い続ける牛飼い」の姿を描いたこの牧場は、絵本にもなって紹介されている。(希望の牧場　岩崎書店)

こんな現状を見ようともしない政府は、これからも原発を再稼働しようとしている。

神様は、私たちに自由意志を与えてくださった。自由意志だからこそ私たちは、行動や行いを真剣に考えて答えを出さなくては、いけないのではないだろうか。

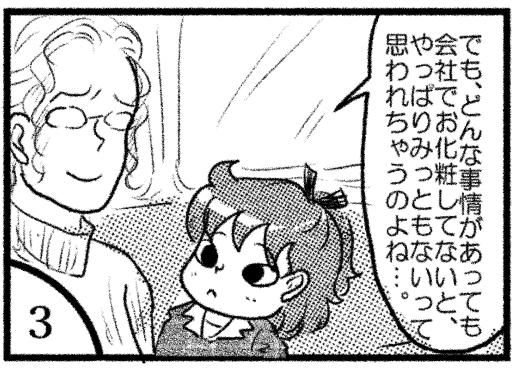
30年ぐらい前テレビのCMで有名な女優が、原発の安全性と利便性を伝えるCMをしていた事を思い出す。そのとき「このひとは、もし事故がおきたらどうするんだろう」と何気なく思ったことを今思い出した。でもそれは、今の私も同類でなにもしていない。他人事で現実をみていない。もっとたくさんの本当のことを知り、声にしていかなければと思った。


Otちゃんの
La La La
by. タナカ・ユーマ
Human Rights

都会の女はみんなきれいだ
でも、時々みっともない。
……。
車内での化粧はご遠慮ください。

#41.電車の中で…

ねぇねぇ、どうしてお化粧してない女の人は言わないの？
ガタン
ゴトン
1


でも、どんな事情があっても会社でお化粧してないと、やっぱりみっともないって思われちゃうのよね…。
3

前の日に遅くまで働いてたとか、朝、急に子どもが熱を出したとか…。
2
そうだよねぇ、それぞれ色んな事情があるっていたすのに、朝にしなお化粧するのか時間がねぇ。

4
お化粧しなくても文句言われるなんて、何だかなぁ。

じゃ、じゃあざ、いまのお母ぁはあまりお化粧しないのはどうして？
あせ
あせ
まったくよ…高校卒業までいたい、はお化粧したら不良っていわれるのに、卒業したら、してないと非常識って言われるし…
みぃちゃんなりに気をつかってみる↑
べった
しなくていいんじゃない？
ぱぁっ
それはねぇ、あなたのお父さんが、お化粧しない人の方が好きだからなのよ。
どっちに行っても何か言われる…！
オシャレ
お仕事
会社で働くようになっても、仕事ばっかりしてたら"仕事だけの女"だと言われるし、オシャレを頑張ったら"可愛いだけじゃダメ"って言われるの。
世の中全体が、"女の人は化粧すべき"って意識から解放されればいいのにね。
パパ最高!!
のろけだ……！
よかった…
男の人だったら、そんなこと言われずに仕事に没頭できるのにね……。
若い頃を思い出したらハラがたってきた…！
ん！
みんなが自分のために、楽しくお化粧できるようになったらいいね！
2016.11
あの、みぃちゃん、なんか訊いちゃいけないこと訊いちゃった？
どよ
どよ

第８回対話集会・最終回

山村さん■おはようございます。昨日は最後に解放運動の話をしていただいて、同和対策審議会答申と言う、後から聞いたらこの言葉の意味がわからないと、言われて、しまった！と思いました。簡単に説明をすると、被差別部落に差別があるという事を国が認めて「国の責任できちっと解消していきますよ」と、約束をしているのがこの「答申」なのです。国の補助金をもらってやるのはちょっと、と言う人と、それは国の責任としてやってもらわないと、という方と対立が起こった、そんな事があったという事です。今日は識字教育のことを話してもらったらと思ったのですが、山本さんは識字の事はかなり若い時に､20 代から「もう一度学び直したい」という思いを持っておられたのです。その辺の 20 代の勉強はどんなのだったか、お聞きしたいなと、識字への情熱が一番あるような気がしますので。

山本さん■私自身が先ず社会に出て、「文字を持っていない」という事がどんなに恥ずかしい事か、どんなに悔しい事かを体験してきました。みんな普通に学校へ行かれた人は「書けて当たり前、読めて当たり前」ということだと思うのですけれど、決してそうじゃないのですね、学校へ行けなかった悔しさ、文字が持てなかった悔しさ、というのは、私たちの地域の人たちは、多くの人が学校へ行けなかった。同級生でも小学校も満足に行かずに働きに行った人もいるのです。

とにかく文字は取り戻そうと、自分で文字を持たなかったらあかんのだと、そんな中で識字教室をどうして立ち上げたのかという事ですが､私は「やっぱり文字が必要だね」と言いながら運動に関わってきたのです。ある日地域の中で一人のお母さんが、子どもが今年から学校へ行くんやと、やはり学校へ行けばいろんなプリントや、お知らせを持って帰ったりするけれど、それが読めなかったらどうしよう、だから私も字を習いたいのだけれどと、相談に来られたのです。それがきっかけで「文字を知らないのはあんただけと違う私らも知らないし、それなら一緒に勉強しよう。」ということになったのですが、私はそれを何処へお願いに行ったらいいのか、そのへんが分からなかったんですよ。文字を取り戻したい、習いたいと言う気持ちで、学校の先生にお願いしようと、小学校へ行って私たちが文字を知らなかったら、子どもも可哀想だし先生何とか字を教えてもらえないかと、私らは学校へ何回か通いました。一生懸命学校にすがったのです。そしたら、先生も委員会等でお話されたと思いますよ、そんな中で「分かりました私たちがお教えします」と､その時はまだ同和係という先生が何人か学校におられたのです。「山本さん何処でやればいいのですか、場所は何処にしますか」と、言われたのです。私はそこまで考えていなかったんです。私たちの町内でも、その頃に街づくりで改良住宅の建て替え事業が始まっていたのです。私は早く改良住宅に入れたので、子どもは一

人ですし、連れ合いにもその事を言って、そうや、私の家で識字学級の勉強をしたらという事で、私の家が「識字教室」の始まりです。

1年くらいして公の場所、隣保館で識字教室をすることになり、公の場所ですので公に募集をされて「識字教室を開講します、どうぞ皆さんご参加してください」と。皆さん文字を取り戻したい、社会性を求めるとかはいいのですけれど、ちょっと複雑な事情があったのは、解放同盟が分裂した共産系の人と、みんな同じ地域の人ですし、そういう方も来られます。それも当然の事ですし、公の教室ですから、ちょっとその辺で意見が合わない事もありました。「事業進めるについてどうするのか」と、意見の違いもありましたけれど、やはり地域の人は「文字を取り戻したい」という事で来られるのだから、そんなイデオロギーに拘らずに、意見の違いは譲り合って行こうという事で、私たちの所はうまく行ったと思います。

山村さん■今おもしろい話を聞いたなと、全解連と地域によっては同盟系の事業と分かれている所がありますが、西三条の山本さんの所は、差別を無くすという課題は一緒だから、同じ場所で受けると決めたんですね。

山本さん■はい、決めました。京都市内で別々に事業をされている所もありました。曜日に分かれて今日は同盟さん、この日は全解連さんという形でやっている所がありました。だけど、私の考えとしては、そうじゃない、共産系の人も、そうでない人も私たちやはり同じ苦しみを持ってここまで来たんだと、私の思いはそうでした。だから文字を求めるのは、どの会であっても地域の人が知識を向上させればいい事なのじゃないかと言う思いで、一緒に識字教室を進めて行きました。進める中で、ただ文字を取り戻すだけじゃない、これを仕事に繋げて行きたいし、労働に繋げて行く、今私たちが学校へ行き直せるか、と言えばそう簡単じゃない、もし文字が取り戻すと同時に、何か資格を持っている方が働きやすいだろうと、いう事で、文字を取り戻すと同時に資格を取りましょうと、給食調理の資格を、またはヘルパーさんの資格、そういうものを取って行きましょうと、話を進めて行きました。

山村さん■文字を学ばれるだけじゃなく、就職という目的を持って、西三条の皆さんは識字学級に臨まれた。文字を勉強する中で何か、資格を取って行きたいとなったのですか。

山本さん■私たちは満足に学校にも行っていないし、そういう中で出来る事って何やろうということで、働くことに有利になればいいと、資格を取る事によって働く場も開けてくると思うのです。

山村さん■その当時山本さんは、何歳位の時のお勉強ですか、

山本さん■私は 30 代からで、40 歳代でその資格を持って学校給食の場に就職していますので、35 ～ 36 歳だったと思います。

山村さん■その時 1 年目に大体何人くらいの人が来られたのですか、女の人が多かったですか、隣保館にどの様な人が来られましたか、

山本さん■女の人が多かったです。男の方は「行きたいけれどなあ」と言っている人もおりました。殆どが女の人だったので、男の人ってシャイなところがありますしね。女の人が多い中はなかなか勇気がいると言っておられました。

私たちは「一人の問題は万民の問題で、万民の問題は一人の問題だ」と、運動で教えていただきました。私は皆さんの力になりたいと、1 年生から習いたいと言う人があればその人達と一緒に小学校 1 年生からやりました。

山村さん■ 1 年生から始めるという事は鉛筆の握り方から、というのが私らの時にありましたけれど、どうでしたか。

山本さん■そうです。その中に韓国の人が 2 人おられました。1 人の人は学校って知らん、と言っておられました。その人も文字は習いたいし、その人は母国語も分からない人でしたが、そういう中で日本へ来て生活しておられる人なんですね、その人は鉛筆の持ち方も分からない人でしが、先生が鉛筆の持ち方から教えて、線を引く、丸を書くその事から教えていかれました。その人も「来てよかった、これで字が覚えられるのか」と喜んで参加しておられました。残念なことに京都市は、識字教室は閉鎖しています。識字教室が無くなったんですけれど、その人はずっと通って来て、やっと 4 年生くらいの学力になって、今までは自分がバスでお仕事に行くの時に、絶えず「私はこういう所へ行きたいんだけれど、このバスでいいんですか」と聞いて行った。だけど先生に文字も数字も教えて貰ったので、人に聞かなくてもバスに乗れた。「まあ目の前が明るくなった」と、識字教室の中で話してくれました。

私たちも同じように苦しい思いをして来たけれど、私ら以上に、違うお国へ来てそういう苦労をされているんだなあとみんなで泣きながらその話を聞いた覚えがあります。

参加者■山本さんの話を聞いていて、「いいなあ」と思ったのが、同じ苦しみ、同じ悲しみを持って来たのだから、「一緒にやって行こう」と言える、なんて言えばいいか、自分たちの中に閉じこもらない、それは凄いなあと思いました。それと、文字を取り戻

すなら、労働に繋げていくために資格を取る、現実的だし、単なる向上的だけじゃなく、生きるための知恵みたいなのが、ここで生かされている。一つ質問があるんですけれど、一緒にやって行かれた時に分裂した痛さや辛さのようなものがその識字教室の中では、その辺がどうしていたのかなあと。

山本さん■やはり、イデオロギーをちゃんと前に出してくる人もありますし、私はそれを出してこられたら、話が出来るのですよ。ただ黙って変に事業を妨害されると困りますけれども。別に私が識字教室を仕切っている訳じゃないのですが、きつく言われる人もありました。呼びかけたという立場がありますので、その人たちは攻撃して来る時もありましたけれど、「何を言っているの、あなたも地域の人、私もここの地域の者そういう中で、何でいがみ合う事があるのですか」と、私は常に言って来ました。私たちがそういう事で揉めていても、一般の人から見たら、あの人は共産党系やで、この人は解放同盟の人やでと、分けて見てくれますか、私たちは「文字を取り戻そう」と言う事でやっている、同じ思いだけだから、いがみ合うような事は前に出さない方がいいのと違うか、「同じ部落の人同士が何を言っているのや」と、外から見たらそう見られるよ、それは良くない事でしょうと言って来ました。

参加者■ありがとうございました。やはり文字の分らない悔しさや悲しさは、よく父が言っていたんですね。文字が分からないと、色んなことを任されてもね、行ったのは5年生くらいまででしょうか、小学校は卒業をしていないのですね。だから子どもには教育を就けないと、と、子どもには教育の為なら何でもするという感じで、私は学校を出してもらいましたし、そういう思いだったんだなと思いました。私が嫁いで37～8年くらいになるんですが、住宅には子どもも多くて、人も沢山いたのですが、その人たちも出て行って、今は1人とか、若者はみんな外へ出て行っているという感じです。生活が出来にくい人が残って、どういうふうに関わったらいいのかなと思いながら聞かせていただきました。

山本さん■そうですね、私の町内にもそういう方がありますね、気がついた人はどんどんと外へ出て行く、それはいい事だと思うのですよ、やはり自分が住みたいところに住めるという事で、どんどん出ていく事はいい事だと思うのですけれど、今後の対策としては、これからの課題だと思います。残っている人は高齢者と生活保護を受けている方、私の町内でも、力の付いた人はどんどんと出て行って、それで立派にやっておられるので、結構な話やなと。私たちの運動の目標と言うのは、「部落を解放しましょう」という事は「自分も解放しましょう」という事ですので、その後の課題としては、何処にでもある事じゃないかと思います。

参加者■ぼくは野宿している人の支援をして来て、自分の名前が書けない人、そういう人が実際に居るのだなということを体験しました。ずっと「生活保護を受けないか」と、進めているのですけれど、どういう理由かなと思っていたら、結局役所へ行って字が書けないという事が役所へ行きたくない理由だっんです。最近ある方は８年くらい外で暮らしていたんですね、大変な世界だなという事を改めて知ったのです。

参加者■昨日から具体的なお話を聞かせていただいて、識字という事をしっかり受け止めていなかったけれど、文字を取り戻す大切さと、やはり労働につなげて資格を取って行く事は自分が生きていく中で大切な事で、部落解放と自分自身の解放と生きて行くという事とをお聞きして、山本さんの中に本質的なものがあるので、いろんな方と平らに話して行ける。山本さんの心の広さというか、在日の方の言葉が分らない事とか、大変だなと私も涙が出て来ました。よく分かりましたありがとうございました。

参加者■私の行っている教会でフィリピン人と結婚されている人や、またベトナムの人や、あるいはボートピープルで入って来た人たちが永住しています。あるときフィリピンのシスターたちに、「私はフィリピンから来てお母さんたちには、いろんなお世話は出来るけれど、その中で生まれた子どもの精神的、霊的なお世話は出来ないんです」と言われたのです。フィリピン人のお母さんと日本人のお父さんとの間に生まれた小学四年生の子どもが「侍者」でお手伝いをしてくれるのですが、お母さんが山本さんがおっしゃったように言葉がね、日本語がよく解らない中で一人で苦しむんじゃないかなと、お話を聞きながらおもいました。識字学級という日本語の勉強を、もう少し教会でもやった方がいいんじゃないかなと。私たちは見えていないのですね、生活の中で苦しんでいるとか、何となく言葉を交わしているけれど、苦しんでいるのかなと、お話を聞きながら思いました。教会の今の大事な課題かなと思いました。

山本さん■調理委員も地域の包括センターで、校内の同和研修の時には必ずみんなが出て行って、自分たちの思いを話するんですけれど、なかなかそういう所へは皆さん出てもらえなかったのです。先生ばかりの会議で嫌やと言って、ある時一人の先生が、「私らがこうして来ているのに、肝心要の人が何で研修に出てこられないの」言われたのです。「肝心要って誰やな」って私は言ったんです。その先生にしてみたら、現業職は部落の人、という意識があったんでしょうね。勿論地域の人が多かったですけれど、みんなが地域の人じゃないのです、そういうイメージがあったんでしょうね。「肝心要の人が来やらへん」と言われた事に「どう言う事」と聞き直したんです。「同和問題」というのは、その人たちだけの問題かと、そこで随分話しした事があります。先生には「同和問題は無いのですか」と、話をして行ったんです。私は先生に「部落差別と言うのは、

地域の人だけが被害を被るわけでもない、これは一つの社会問題じゃないのですか」と。「先生だってこれから結婚もされるでしょう、恋愛もされるでしょう、その中でもし相手さんが部落の人だったらどうされますか、『あんた部落の人だからやめとくは』と言う人も中にはあるかも分かりませんけれど、人を好きになるのに初めから『あんた部落の人ですか、あんた一般の人ですか』と言って好きになるわけじゃないと思うのです。恋愛と言うように、男女がそれぞれ出会った人との間で恋愛があると思うのです」

山村さん■私も大学を出て教師で働いていた事もありますが、その時も、職員会議は勿論あるじゃないですか、出席は先生だけで当たり前やと思っていたのですよ。山本さんの本を読ませていただいて、今の話も聞いて、職員会議って学校の養護の先生や事務員さんも出てというのは、驚きでした。私の学校では先生だけの会議だったのですが、山本さんの学校はどんな感じだったのですか、職員会議と言うのは、全員が出る、職員ですものね。

山本さん■みんな職員ですものね、だけど学校運営というのは、やはり職員がいなければ成り立たないわけです。だけど人数の多い、少ないはありますね、先生が多いですけれど、私らの仕事は学校給食を責任もってやって行く事でしょう。養護の先生も養護の仕事を一人でやって行かれる、それぞれが学校の中で任務を負っていますし、研修に出るのも、職員会議に出るのも当たり前です。

山村さん■今話しを聞いてすごく納得したのですけれど、給食って学校の定められている分野ではあるのですけれど、地域によっては、給食室が無い所があるので一概に言えないのですが、全員公務員なのだと、聞いて分かりました。「職員会議に出さして」と言って、学校先生がびっくりしておられたという事ですが。

山本さん■私は最初から職員会議は出ないとあかんと思っていました。学校によって出なくていいと言っておられた方もありました。私の事は「あの人は出るよ」と言っていましたね。

私は給食調理師として勤められたのは、とにかく文字を取り戻したい、自分が読み書きをしたいという思いを常に持っていましたし、私は良い所へ就職させてもらったと思いました。ただの先生がいっぱい居てくださるのですから、何か一つのものを習いに行ったらお金が掛かりますけれど、ここで先生に教えてもらったらお金が掛からへんやと、私はそう思いましたよ、就職した時にすぐにそう思いました。積極的に聞きに行きました。恥ずかしいけれど、そんな事を言っていられない、とにかく文字を取り戻したいという一念でした。皆さん「旅の恥はかき捨てや」と、よく言われますけれど、私ほど恥をかいた人間は無いと思います。恥をかくことをためらっていたら字も書けない、私は

良かったです。そういう所へ就職出来た事がよかったです。

私はとにかく「学校へ行き直したい」という気持ちがいっぱいあったので、「定年になったら」と、思いましたよ。定年になった時に「山本さん２年間嘱託がありますよ」と言ってくださったのです。私は嬉しいなあ、これでちょっと学校へ行き直せると思ったけれど、やっぱり生活を取りましたね、「あ、そうですかそしたら残ります」と言いました。本当にお金というのは大事ですし、私は小さい時から教科書も持っていなかったという悲しい思いをしていますので、とにかくお金を大切にしないと、という思いで、学校へも行きたいけれどやはり生活を取りましたね。

山村さん■それは、仕事のない辛さを身にしみてという事でしょうね。いいお話を聞いて、私もちゃんと仕事をと思いながら聞いていたんですけれど、２年間の嘱託を終えられて、学校に入り直されたのですか。

山本さん■はい、京都に一箇所だけ「郁文中学」が四条大宮の所にあったのです。そこへ行き直すという事でお願いに行ったのです。そこは殆どが韓国の人でした。人によっては「あそこは朝鮮学校やで」と言っている人がありました。私は学校生活に憧れたのです。勉強だけなら本屋さんへ行けばいろんな勉強になる本は売っています。それでも読み書きは出来たと思いますけれど、私は学校生活に憧れたのです。友達が欲しい、一緒に学べる人が欲しい、そういう事で郁文中学へ行きました。夜間中学校です。３時間の時間帯で学びました。私は自転車で３年間通いました。

山村さん■どうでした。楽しいかったですか。

山本さん■楽しかったですよ、行きたい、行きたいと思っている学校ですので、夜間中学というのは高齢者の方が多かったです。そこでいろんな人と出会いをさせてもらった有り難かったです。いろんな人の生活も教えてもらったし、フィリピンの人もおられたし、「もう一つ日本語が分からなくて」という人もいりましたし、いろんな人との出会いで、ここで私もやって行くんだという思いがありました。

山村さん■教科書は中学校の教科書を使ってですか。

山本さん■もちろんそうです。教科書の無償になった話は、長浜市のお母さんが立ち上がってくれたのです。それまでは有償でしたし、1961 年高知県の長浜支部の人たちが義務教育の補償をしなさいと立ち上がったのが始まりなのです。そこから運動を通しての広がりがあったんですけれど、まあご苦労なさったと思います。その中心で事務局を

なさった人たちと「久しぶりやな」とお会いしたのですが、その人も、もう 80 歳くらいです。その時のご苦労を話していただきましたが、それは大変なご苦労でした。行政との話し合い、地域との話し合いも二転三転しながら、それを自分たちの運動として勝ち取って来た。勿論立ち上げた時は、地域の人だけじゃなくて一般の人たちも一緒にやった運動だと聞いていました。二転三転する中で最後は高知県長浜市の人たちの運動だったそうです。私はこの運動は、解放同盟は自慢してもいいと思います。そしたら同盟の地域の子どもだけが補償されたかというと、決してそうじゃない、日本全国の子どもが補償されたという話です。運動したのは地域の人ですが、地域の子どもだけじゃない日本中の子どもが教育を補償された。これは、解放同盟は本当に自慢していい運動じゃないかなと、あんまり自慢するものはありませんけれど。

山村さん■あんまりね、もっと自慢すればいいのにと思いますね。

山本さん■今は高校まで無償されていますね。それと、これはあまり知られていないと思いますけれど、JR のそれぞれの駅名「ひらがな」で書いていると思うのですよ、勿論漢字で書いている所もありますけれど、だいたい平仮名が多いですね、「誰でもが読める字にしなさい」と解放同盟が言ったのですよ。誰でもが読める駅名でないと、小さい子どもでも読める字、お年寄りでも、みんなが読める字でなかったらおかしい、という事で、これは解放同盟ですよ、悪いことはよく言われるんですよ。解放同盟あんなんやった、こんなんやったと、なかなか教科書の無償のことも知らない人も多いし、駅の平仮名も関わったという事も知らない人が多いし「解放同盟もアピール下手やな」と言った事もあるのですよ。

山村さん■アピール上手じゃないですね、DVD にありましたけれど、定時制高校へは入試を受けて行かれたと思いますけれど、入試は普通学級ですか、その辺の入試の事などお話していただけたらと思います。

山本さん■私は 2 年嘱託で残ったので 62 歳ですね、それで中学を 3 年行って、それから定時制でしょう。自信もないし、どうしょうと思っていたんですが、先生も「ダメもとで行け」と言われるし、「これ以上恥かくことは嫌やで」という様な事を言いながら、試験の当日、これは昼の試験ですよ、みんな現役の子どもですよ、後でわかったのですが、私のクラスで一番若い子は、2 年ほど不登校だった子です。その子が 17 歳で、後はみんな現役ですね、私が教室入った時に、みんな「このおばあちゃん間違って来たんと違うか」と、そらそうですよね、おばあちゃん教室を間違って、「何処からか紛れ込んだんと違うか」と、いうようなものですね。65 歳ですね、私もびっくりしたけれど、

子どもたちはもっとびっくりしたでしょうね、一応試験を受けて、発表を見に行ったら合格していました。

「せっかく受かったんだから頑張って行きや」とか言われて、中学校の先生が後押してくださったんです。中学校の先生だけじゃない、それこそ識字の先生が教えてくださった。後押してくださった方々に感謝で、「頑張らなあかんなあ」と、入学式の日になりました。私の中学の校長先生も入学式には行くよ、と来てくださったのです。先生何人かが「おめでとう」、「行きますよ」と言って来てくださったのです。自分の決められた席へ行こうと思ったら、先生が「保護者の席はこっちですよ」と言われまして、そんな事が度々あるんですよ。「先生実はね、名簿を見てください」と言って、先生は「すみません山本さんこちらです」と、入学式からそれですよ、私にしてみたら孫みたいなものです。この子達はお昼働いて夜来るのですね、私は定年退職してありがたいなと思いました。この子達と、どうしてコミュニケーション取って行くかなと思いました。何時になったらこの子達とコミュニケーションが取れて人間関係が作れるのかなと思いました。私もとにかく、学校は勉強するとこ、この子達も、昼間はスーパーで働いたり、ガソリンスタンドで働いたり、そういう子ども達の話を聞いて行きたいなと思いました。

山村さん■この後大学に行かれるのですけれど、大学って、行くゾーという気持ちでないと行かないと思うのですが、

山本さん■私は思ったのですよ、定時制高校でこれだけのことを教えていただけるのだから、大学では一体何を、もっとすごい事を教えていただけるのかなあと、私は世間が狭かったのですね。お兄ちゃんも、お姉ちゃんも学校には関係無しで来た状態ですので、定時制高校で色んなことを教えてもらったんだから、大学ってどんな所かな、行きたいなという気持ちになったのです。国語の先生がいっぱい教えてくださったのです。作文にしたって、何にしたって、日本語は飽きるほど国語の先生が教えてくださったし、私は年齢が行っているので、普通じゃなくて社会人入学ですね。それでもみんなと一緒に受けるのですけれど、社会人入学は作文を書く事になっているのです。それを、国語の先生が毎日題を出してきて「明日書いて来てね」と、教えてもらい、分からへんなあ。と言いながら書き続けて行ったのです。そのおかげで、大学を受けようとなったのですが、69 歳ですよ、本当でしたら物忘れが始まっていますよ、そうでしょう。物忘れが始まっている年齢で受けるか、と自分でも思ったのですけれど、それこそダメ元で、今まで教えてもらった先生が、「行け、頑張れ！」と言ってくださる声で受験しました。答案を配られて「まだ見たらダメですよ」、「はい」と先生が言って初めて見るんですね、そしたら、お題は「宮大工」です。みなさんも一生懸命ですよ、私も一生懸命３回読みました。読んで行くと、宮大工が自分のお弟子さんを育てる話だったのです。文章の中

に「育てる」私は宮大工さんだけのことじゃなく、私は「人を育てる」ということだと、私は我が子を今日まで育てて来た、それを書きました。子育て、人を育てる事、なんだと思って自分と子どもと一緒に歩んできた道を書いたんです。良かったかどかはわかりませんけれど、何とか合格したのです。

私は運動の中で教育を得ましたし、運動が無かったら、今日ここでみなさんにお話することも出来なかったし、私にしたら運動はとても大事です。親も教えてくれない事を運動で教えてもらって、生活を立て直して来たというのがあります。私は一番腹が立つのは運動を悪利用する人は許せないと思っています。私の子は、運動はしていません。

山村さん■自分がしていることを運動だと思っていないのでしょう。私の個人的な意見ですけれど、出身やアイディンティティーをきちんと持ちながら日々の生活をし、働いてという事で十分でしょう。「何なに反対」というのが運動ではないと思っているんですけれど、子どもさんがいらっしゃるという事ですが、ご自分の出身を知っておられるのでしょうね。

山本さん■知っています。６年生の時に自分で言っていますしね、ぼくは部落の子やで、学校でも自分をちゃんと受け止めてくれる先生がある事が大事だと思います。何時までもその事にこだわっていたら、何も出来ないのです。学校で私はいろんな人に会い、途中で来られなくなった人もおられましたが、私は偉かったなと思うのです。卒業式の日に卒業証書を同じようにその人に渡してあげられた。この人はもう亡くなっておられるんですけれど、話しを聞いた時はガンの末期でした。勿論地域の人です、自分も満足に学校へ行けなかった辛さ悲しさを私と会った時に淡々と語ってくれた事があります。だから同和教育と言うのは地域の人だけの教育じゃない、みんなが良くなって行くんじゃないかなと私は思うのです。

２日間、皆さんとお会い出来て本当に良かったなあと思っています。これもやはり私が運動して来たおかげかなと、運動をしていなかったら皆さんとお会い出来ていなかったと思いますし、元々今年５月にお会い出来たというのが御縁で１人の人とお会いする事によって、これだけの人とお会い出来た事は何と幸せだなと、私の体験を聞いてもらったんですけれども、少しでもこれからの皆さんの生活の中でそれが生かされていくことであったら、本当に幸せ者だなと、ありがとうございました。

「水平社宣言」は皆さんよく聞いておられるんじゃないかなと思います。「水平社宣言」世界記録遺産に２回も落ちているんですけれど、残念だと思っています。集会がある度に最初に「水平社宣言」を読まれるんですけれど、「水平社宣言」は私たちにとっては命の始まりみたいなもので、何処まで覚えているか分かりませんけれど、読ませていただきます。

全国に散在する吾が特殊部落民よ、団結せよ、
長い間虐（いじめ）られて来た兄弟よ、

過去半世紀間に種々なる方法と、
多くの人々によってなされた吾（われ）等（ら）のための運動が、
何等（なんら）の有難い効果を齎（もたら）さなかった事実は、
夫（それ）等（ら）すべてが吾々によって、又他の人々によって
毎（つね）に人間を冒涜（ぼうとく）されていた罰であったのだ。

そしてこれ等の人間を勦（いたわ）るかの如き運動は、
かえって多くの兄弟を堕落（だらく）させた事を想えば、
此（この）際（さい）吾等の中より人間を尊敬する事によって自ら解放せんとする
者の集団（しゅうだん）運動を起こせるは、寧（むし）ろ必然である。

兄弟よ、
吾等の祖先は自由、平等の渇仰者（かつこうしゃ）であり、實行者であった。

陋劣（ろうれつ）なる階級制作の犠牲者であり男らしき産業的殉教者であったのだ。
ケモノの皮剥ぐ報酬として、生々しき人間の皮を剥ぎ取られ、
ケモノの心臓を裂く代價（だいか）として、暖かい人間の心臓を引き裂かれ、
そこへ下らない嘲笑（ちょうしょう）の唾まで吐きかけられた

呪われの夜の悪夢のうちにも、
なお誇りうる人間の血は、涸（か）れずにあった。

そうだ、そして吾々は、
この血を受けて人間が神にかわろうとする時代にあうたのだ。
犠牲者がその烙印を投げ返す時が来たのだ。

殉教者が、その荊冠を祝福される時が来たのだ。
吾々がエタである事を誇り得る時が来たのだ。
吾々は、かならず卑屈なる言葉と怯懦（きょうだ）なる行為によって、
祖先を辱（はずかし）め、人間を冒涜してはならぬ。

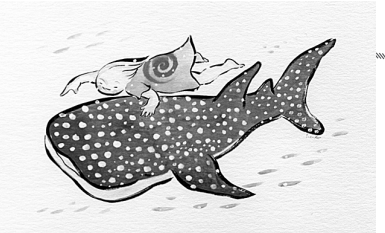
そうして人の世の冷たさが、何（ど）んなに冷たいか、
人間を勦（いたわ）る事が何であるかをよく知っている吾々は、
心から人生の熱と光を願球（がんきゅう）礼賛（らいさん）するものである。

水平社は、かくして生まれた。

人の世に熱あれ、人間に光あれ。

大正十一年三月三日　　全国水平社

第９回対話集会



日時：2017 年 1 月 8 日（日）13 時～
　　9 日（祭）12 時 30 分
場所：大阪梅田教会サクラファミリアー
講師：山本純子さん
　　プロフィール
　初めての勤めた、同和保育所で、地域の母親から「先生部落差別の事わかってんの !!」とつきつけられた。・・・「昔のこと、ずっと遠くの事」と思っていた部落差別が、「今 !! ここにあるんだ !!」と感じた。学習会での同対審の勉強や啓発ビデオよりも、地域の母親との出会いのインパクトが強烈だった。それから結婚。自分が地域の母親となり仕事を続けてきた。3 人の息子がいるただのおばちゃんです。（本人談）

参加費：10000 円（宿泊・交流会）・3000 円（交流会参加）・500 円（集会のみ）

キリトリ

2016 年対話集会 申　込　書

名前		
住所	〒	
連絡先	TEL	FAX
	E -mail	

参加費：10000 円（宿泊・交流会）・ 3000 円（交流会参加）・ 500 円（集会のみ）
　　（参加部分を○して下さい）

申込締切は 12 月 10 日

連絡先：カトリック大阪教会管区部落差別人権活動センター
　　京都市中京区河原町三条上るカトリック会館７Ｆ　　TEL ／ FAX 075 － 223 － 2291